

「盆蘭図」(個人蔵)について

ここに紹介する「盆蘭図」(個人蔵、一幅、絹本着色、一一三・九×四三・五)【図1】は、本館のコレクション展示「千花百果―四季をめぐる中国書画」(平成二十九年九月二日〜十月一日)で展示された作品である。昭和九年に恩賜京都博物館で開催された「恩賜十年記念展観」に出陳されており、その図録にモノクロ図版が掲載されている⁽¹⁾。鉢に植わった蘭を真正面から捉えた印象的な作品である。中国では、草花を植える器を「花盆」⁽²⁾といい、花盆に蘭を植えたものを「盆蘭」と呼んでいる。蘭は、古くから高潔な君子の象徴として愛され、鑑賞用に栽培されてきた。唐代の詩人王維は、花盆に美石を敷き蘭を養ったと伝えられ⁽³⁾、宋代には、『金漳蘭譜』や『王氏蘭譜』などの専門書も生まれた⁽³⁾。盆蘭は、中国の庭園画等の中にしばしば見出されるが、本図のように実物大と思われる大きさで盆蘭のみを鈎勒填彩の描法によって描いたものは珍しい。類例として挙げられるのは、朝鮮画の「蘭図」(十七世紀、個人蔵⁽⁴⁾)や、近年展覽会が開催され広く知られるようになった大坂の画家・林閨苑の「寒蘭図」⁽⁵⁾、「紫寒蘭図」(ともに安永八年、個人蔵⁽⁵⁾)である。閨苑は明人の画法を慕ったと伝承される画家であり⁽⁶⁾、「寒蘭図」等は本図のよ

うな中国画を参照して制作された可能性が高い。

本図の蘭は、一茎に六、七つの花卉を付け白色の花を咲かせている【図2】。花卉には紫色で数条の脈が引かれ、唇弁には斑点が描かれている。紫色の蕾の状態のものから、盛りを過ぎて地面に落下した花卉までを表し、まっすぐに伸びる線状の葉は先端が茶色に変色している。植物の生態を写実的に描いていると言えるだろう。ただ、花盆の上に敷かれた石や地面の石は墨で点を打つだけのあっさりとした描写である。花盆は、粉青色で雲と花の文様が施されている。印象的なのは、花盆の中央に堂々と押された印章である【図3】。印文は「黃氏監直」と読め、文意から収蔵印か、あるいは、現実の盆蘭そのものを見たという印の可能性もあるが明確でない。付属の箱には「明人」と墨書されるのみである。

本図の蘭とよく似たものを描いた作品として、台北・国立故宮博物院に所蔵される王鑑筆「花石盆蘭図」(一幅、絹本着色、一五九・二×七一・一)【図4】⁽⁷⁾がある。この画は、奇石の上に盆蘭を描く奇妙な構図であるが、そこに描かれた蘭は、細長い葉、花卉の形態や色彩など本図の蘭の品種に近いと思われる。また、それだけでな

く花盆の土の表面に墨点を打つなど描写法も似ている。王鑑（一五九八〜一六七七）は、明末から清初に活躍した蘇州出身の文人画家で四王呉惲の一人に数えられる。崇禎六年（一六三三）三六歳で郷試に挙げられ、同八年広東廉州の知県となったが二年後官を辞して帰郷、その後は同郷の王時敏と親しく交わった。「花石盆蘭図」には「申戌夏日」の年紀があり崇禎七年の夏に制作されたことがわかる。この画は、清代の宮廷書画目録『石渠宝笈続編』（乾隆五十八年・一七九三編）に収録されており、乾隆三十六年（一七七二）の御題が記される。王鑑の遺作は山水画が多く花卉を主題としたものは珍しいが、探幽縮図の「和漢梅竹花鳥図卷」（個人蔵）にはこれとは別の王鑑画が模写されている【図5】。略筆だが、一茎に複数の花卉をつけていることが分かる。「甲申初夏日寫 王鑑」という落款写しから崇禎十七年（一六四四）の初夏の制作であること、また探幽による「中古繪大形画也」という付記から大きな画面の作品であったことが判明する。二つの王鑑画は、どちらも夏に制作されたものだが、この時期に花を咲かせる蘭には、建蘭（学名 *Cymbidium ensifolium*、和名スルガラン）【図6】がある。福建省に多く生息するのでその名があり、別名を雄蘭という。『王氏蘭譜』にも「建蘭」が記され古くから鑑賞されてきた。本図の蘭は王鑑画とよく似ていることから、建蘭を描いたものと思われる。

なぜこのような形式の蘭図が描かれるようになったのか現時点で明確な答えは得られないが、これら「蘭の肖像」ともいえる盆蘭図の制作には、蘭を栽培し賞翫する園芸文化のあり方と深く関わっていることは確かである。

（大阪大学大学院、平成二十九年度大阪市立美術館インターン）

注

- (1) 恩賜京都博物館編『恩賜十周年記念展観図録』（一九三四年）に、「蘭圖、筆者不詳、絹本着色、一幅、竪三尺七寸八分、横一尺四寸四分、島根縣勝部博士蔵」とある。
- (2) 唐・馮贄編『記事珠』（唐人説薈）第六卷所収）に「貯蘭蕙 王維以黄磁斗貯蘭蕙、養以綺石、累年彌盛」とある。丸島秀夫・胡運驊編『中国盆景の世界 第一卷 盆景』（農山漁村文化協会、二〇〇〇年）参照。
- (3) 佐藤武敏訳・編『東洋文庫六二二 中国の花譜』（平凡社、一九九七年）参照。
- (4) 栃木県立美術館ほか『朝鮮王朝の絵画と日本』宗達、大雅、若冲も学んだ隣国の美』展図録（二〇〇八〜九年）第五十二図「蘭図」。
- (5) 千葉市美術館・大阪歴史博物館『唐えもん―武禪に閨苑、若冲も』展図録（二〇一五年）の第一一四図「紫寒蘭図」、第一二四図「寒蘭図」。岩佐伸一「唐絵師・林閨苑の作品より」、『美術フォーラム21』一七号（二〇〇八年）参照。
- (6) 『画乗要略』（天保三年刊）に岡本豊彦の言として「閨苑性敏慧、蚤慕明人之画」とある。岩佐伸一「大坂の唐画師・林閨苑―文献資料の整理と紹介―」『大阪歴史博物館共同研究成果報告書』一号（二〇〇七年）参照。
- (7) 国立故宮博物院編輯委員會編『故宮書畫圖錄 第九卷』（国立故宮博物院一九九二年）、一一頁。
- (8) 「石臺之上蔚盆蘭、臺下秋花各種攢、位置合宜精寓意、寧論傳綠與塗丹辛卯新秋御題」
- (9) 文人画研究所編『探幽縮図』（數本莊五郎、一九八六年）、九頁。
- (10) 「寛文三五月七日 本多下総殿より表具取合頼來 中古繪大形画也」
- (11) 『山溪カラー名鑑 蘭』（山と溪谷社、一九九六年）、『原種ラン図鑑Ⅰ解説編』および『原種ラン図鑑Ⅱ写真編』（日本放送出版会、二〇〇三年）参照。
- (12) 「建蘭、色白而潔、味苕而幽、葉不甚長、只近二尺許、深緑可愛、最怕霜凝日曬則葉尾皆焦、愛肥惡燥、好濕惡濁、清香皎潔、勝於漳蘭、但葉不如漳蘭修長、此南建之奇品也、品第亦多、而予尚未造奇妙、宜黑泥和沙」
- (13) 盆蘭図と呼ばれる作品には、他に明・孫克弘「盆蘭図」（『故宮書畫圖錄

第八卷』、一九九一年、一八三頁）、清・蔣穉「盆蘭図」（『故宮書畫圖錄第十二卷』一九九三年、二六一頁）がある。孫克弘の作品は墨筆で描かれ、盆のなかに奇石が添えられる。盆蘭図の発生と形成には、それまでに多く描かれてきた墨蘭図が影響していることも考えられる。

付記

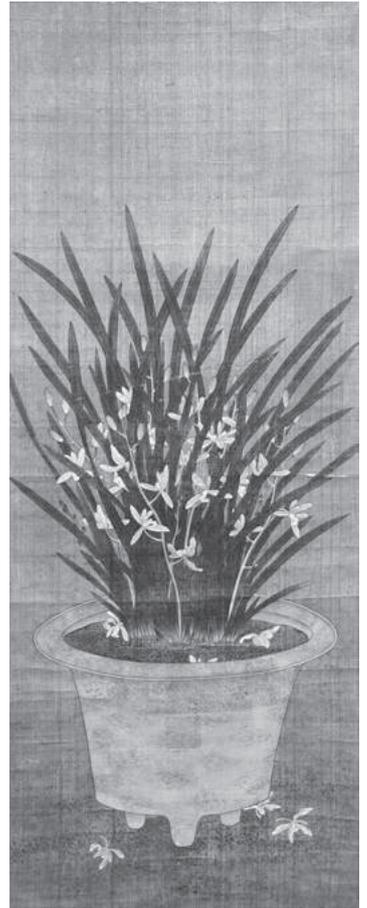
画像掲載の許可を下さったご所蔵者に御礼申し上げます。

図版出典

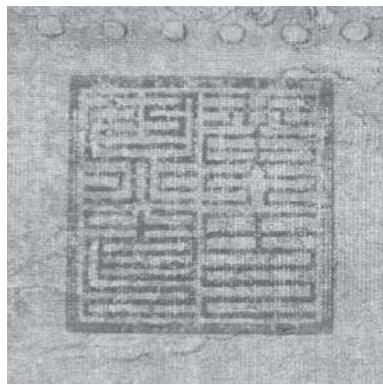
図4：国立故宮博物院編輯委員會編『故宮書畫圖錄 第九卷』（国立故宮博物院、一九九二年）一一頁、図5：文人画研究所編『探幽縮図』（藪本莊五郎、一九八六年）九頁、図6：『原種ラン図鑑Ⅱ写真編』（日本放送出版会、二〇〇三年）一〇三頁



【图2】



【图1】



【图3】



【图6】



【图5】



【图4】